

コックカワサキに扮した元一般人の鎮守府新生活

一柳二郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コックカワサキとなってしまった元一般人が、メタナイトが提督をしている鎮守府でどうにか生きていきます

メタナイトが提督をしていたとある作品に触発され、勢いそのまま作ってしまった完全に自己満足の小説です。キャラ改変、ご都合主義等多々ある駄文ですが、少しでも興味がわきましたら、読んでくださると大変ありがたいです。

10 / 1 僭越ながら連載を再開いたします。

目次

| | |
|--------|----|
| 第1話 | 1 |
| 第2話 | 6 |
| 第3話 | 10 |
| 第4話 | 16 |
| 第5話 | 22 |
| 第6話 | 27 |
| 登場人物紹介 | 33 |
| 第7話 | 35 |
| 第8話 | 39 |
| 第9話 | 44 |
| 第10話 | 50 |
| 第11話 | 56 |

第1話

「いやー、まさかこんなに遅い時間になるとは思わなかったなー」

現在時刻は午前0時過ぎ。真つ暗闇の中、俺は車を運転し、家路をたどっていた。

「それにしても、やっぱりカービィは最高だよ。俺みたいなゲームド下手人間でも十分に楽しめるどころか、全クリまでできちゃうなんてな。ほんと、カービィ最高。カービィカフェにも行くしかないなこりゃー」

そして、先ほどまでやっていたゲームの感想を思わず口にしていった。そのゲームというのは、人気シリーズ「星のカービィ」の最新作スターアライズである。今日、いや、もう日をまたいでいるから正確に言えば昨日、俺としては珍しく友達の部屋に遊びに行ったのだが、その友達がスターアラで遊んでいるのを見て、自分にもプレイさせてほしいと頼んだのだ。

どうせなら初めからプレイしてみるといい、との勧めもあつて新データを使わせてもらった。夕方から遊び始めて、最初は数十分ぐらい遊んだら飽きて終わるだろう、と思っていたのだが、なんのそのすっかりのめりこんでしまっていた。日が変わりつつある時間帯になって、ついにラスボスをも倒したところで満喫したのでお開きしよう、といった具合である。

「ま、全クリといつてもストーリーモードだけだな。達成率100%なんて逆立ちしてもまず無理だろうし、あの分だと…」

他のゲームでもよくあることだが、正直言つてストーリーモードなど言ってしまうえば前座である。ストーリーをクリア後出現するモード、すなわち隠しモードを友達がプレイしているところをみたが、俺の技量じゃ到底クリアなんてできそうには思えなかった。

元来ゲームにはそこまで関心のない人間である。カービィというコンテンツ自体は好きで漫画や、アニメ、そしてプレイ動画は見ることはあつても、実際自分でゲームを買つて遊んでみるということはほとんどなかった。そしてごくたまに自分で買ったゲームも最後まで

クリアするなんてことはまずなく、大抵途中で放り投げていた。そんな俺がこのゲーム、スタアラに限っては曲がりなりにも自力でクリアまでこぎつけたのである。感慨もひとしおであった。そしてとりわけ気に入ったキャラというのが――

「なんととってもカワサキだよ、コックカワサキ。あいつのおかげでクリアできたようなもんだよなー。アニメでもいいキャラしていたけど、さすがですわ」

確か、アニメではもう、色々とぶつとんでいた。料理人にあるまじき行為や発言は度々あったし、問題行動を起こして、住民から恨みをかうことも一度や二度ではなかった。それでも、どこか憎めないヤツであり、カービィとの仲もよく、脇役にしては活躍の場も多めであり、個人的に好きなキャラでもあった。ちゃっかりとおいしいポジションに座っていたのではないかと、今振り返ったら余計そう思えてくる。

「それにひきかえ会社での俺ときたら…あーあ、カワサキが羨ましいよー」

最近の自分の暮らしぶりを思うと、そんなひとりごとをつぶやかずにはいられない心境であった。俺は現在社会人で一人暮らしの生活をしており、派遣社員として日々過ごしている。今勤めている企業には3か月前に配属されたばかりであり、まだまだ分からないことだらけである。にもかかわらず、周りからのフォローはすでないばかりか、手がまわらないことを理由に次々と仕事を押し付けられ、でもって出来が悪い、仕事が遅いと文句ばかり言われ、毎日陰鬱とした気分である。仲のいい人も特にはおらず、人間関係は日を増すごとに悪くなり、空気はとても重苦しく、本当、社会人生活なんてやっていられないと、つくづく思う。

もつとも仕事をするにあたって、そんな悩みを抱えているのは当然自分だけに限った話ではない。同じく社会人になった学生の頃の友人たちに仕事の話聞いても、大体似たようなものだ。なんなら、俺よりも酷そうな職場環境もザラにある。それを聞いても尚、今の職場なんてもうこりこり、さっさと辞めたい、なんて考えてしまう以上、そ

もそも社会人に向いていないのでは？なんて身もふたもないことを考えてしまう。だが、仕事を辞めて他に何かあてがあるかと言われたら、そんなものは全くない。何か新しい分野に挑戦しようという気概もない。となると今の仕事を続けるしかない。じやないと生活することができないのだから。正に絶望的である。ああ、本当、しようもないクソみたいな人生だ。

いつそのこと、カービィの世界に行けたらなあ、なんて思ったりする。だってあの世界働かなくても生きていけるんだぜ？でもって、カワサキになつてしまいたい。そしてできるなら、自分に好意を持ったかわいい女の子にとり囲まれながら過ごしたい、なんとなくそんな気持ちも頭に浮かべていた。え？かわいい女の子とカワサキは何の関係もないだって？仕方ないだろ。男である以上、そう考えてしまうのは。

「おっと、運転に集中しないと」

気が付けば信号が青に変わっていた。発進しなければ。左右は確認しなくても大丈夫だろう。こちらが青であるし、こんな時間で車通りも少ないし。いざ、出発とーつて、あれ？何か大型車が横から近づいてくる。それも結構なスピードで。ちよつと待て、こんなのがぶつかつてきたらひとたまりもー

××
気が付くと俺は見知らぬ天井を見上げていた。どれだけ眠っていたのかは見当もつかないが、こうやって意識があるのなら、なんとか一命はとりとめたのだろう。まあ、生きていて良かったが、大型車があれだけのスピードでぶつかつてきたのである。身体が何ともない訳がない。きつと重傷を負っていることだろう。どうしよう。あれほど嫌がってはいたものの、いざ仕事に行けないとなるとそれはそれで非常に困る。というか仕事に行くどころか、ろくに体も動かせず、普通に生活することすらままならないのではないか、と思いを巡らしていたのだが…

「あれ〜？体は全然痛くないし、腕とか足とかも普通に動かせる〜。どうなつてんだろ〜」

不思議なことに痛みは全くない。色々体の部位を動かしても何ともない。まさか無事だったのだろうか。うん?というかさっきの声って本当に俺か?何か普段出している声とは全然違ったぞ。口調もおかしかったし。でも、不思議とどこかで聞いたような気がする。あれ、なんだっけ?確か―

「あ、気が付いたみたいよ」

「どうやら無事のようなだな」

「良かったですね、司令官!」

俺が頭をひねっていると、どうやら部屋に誰かが入ってきたようで、声が3種類程聞こえてきた。その内2つは高くてかわいらしい、少女のような声で、もう1つは低いが、すっきりとして通った声、こう、なんというかイケボである。あれ、こっちのイケボも聞いたことがあるような―

「って、あーっ!!」

そして、その声が出た方向を向いたら、それはもう、びっくらこいた。何たって目の前には小さな女の子が2人ともう一つ、

「驚くのも無理はない。が、ここは少し落ち着いて話を聞いてくれ」

仮面とマントを着けている丸い身体をした、カービィの世界のキャラクター、メタナイトがいたのだから。あれ?よく見たら帽子も被っている。珍しいな…

そして、俺はさらに驚くことになる。

「カワサキ、まずこの世界についてなのだが…」

ちよつと待て、今、俺のことをカワサキって呼ばなかったか?というかそうだよ、さっきの俺の声どこかで聞いたと思ったら、アニメカービィのカワサキの声だよ。近くに置いてあった鏡で恐る恐る自分の顔を確認してみる。すると―

「やっぱりカワサキになってるくくく!!」

「ねえ、司令官。この人…人でいいのかしら…?大丈夫なの?」

「急に取乱し始めましたよ!」

「おそらく精神状態が錯乱しているのだろう。この状況では致し方あるまい。ある程度のごことは大目に見てやってくれ」

あれ、なんかヤバそうな人だと思われていない？メタナイトにいたっては同情すらしているようだし!?本当にこれどういう状況?どうなってしまったんだ、俺く!?

第2話

「…というわけだが、理解はできそうか？」

あれから少しは落ち着いた俺の様子を見て、メタナイトは現在の状況についての説明をしてくれた。だが、全然頭には入ってきていなかった。正直なところ、まだとまどっており、メタナイトの説明はほとんど把握できていない。でも1点確かなことは分かった。にわかには信じられない話ではあるが、もう、この結論は覆せそうにない。それはすなわち、

「俺、異世界に転移しちやっっているね〜!?しかもこれ艦これの世界だ〜」

うん、この状況だともう確定だろ、これ。定番の、死んだら異世界に来てましたってパターンだ。なんなら、流行りすぎて最近では胸焼けされているレベルの。でも、だからといって、転生した先がコックカワサキってのはどうなのよ?いや、確かにカワサキは好きなキャラではあるし、直前までカワサキになれたらなくなるとアホなことは考えてはいたけれども。

でもって、メタナイトと一緒にいるこの2人は艦娘と呼ばれる存在だ。うん、確かこんなキャラクターいたよ。ゲームについては全く詳しくないけど、相当人気があつて同人誌なんかもたくさんあつたから、俺もほんの少しは知っている。

しかし、なんでまた、艦これの世界なんだ?カービィと全く関係ないよね?もしかして死ぬ直前に、たくさんのかわいい女の子に囲まれながら、一緒に過ごしたいか思っていたからか?ということはもしかして、これって全部俺のせい?自業自得ってヤツ?そんな馬鹿な。

「異世界に来たということ自体は、意外にもすんなり受け入れられたようだな。だが、かんこれ?の世界とは一体なんのことだ…?何か知っているか?吹雪、叢雲」

「いえ、ちよつと私は聞いたことがないですね…」

「私もよ。やっぱり、まだ記憶とか錯乱していて、訳が分からないことをつぶやいてしまうのではないかしら」

メタナイトの問いかけに、そう答える2人。叢雲にいたっては、少し気の毒、といった表情でこちらを見ている。ああ、そうか。ゲーム内のキャラクターにそんなこと言っても伝わるわけがないよな。あまり、軽はずみな発言ばかりしていると、いよいよ頭のおかしい人認定されるぞ。よし、とりあえず今は黙ってしよう。

「それにしても、司令官と同じ星に住んでいたにしては姿が全然違いますねえ。こちらのカワサキさん…でしたよね？司令官よりはまだ人型に近いです」

「そもそも司令官の体形は球形よ。それが異常すぎるのよ。最初見たときは人形だと思えなかったし」

「司令官は自分では、私の体形など私が元住んでいた星では珍しくもなんともない、と言っていましたけど…そこどころどうなんでしょうか？カワサキさん」

「いや、メタナイト卿の言う通り、ポップスターには一頭身の姿をしている人も多いよ、それこそカービィをはじめ…」

「コホン」

黒髪の子に質問されて、思わず答えてしまったが、続けて話そうとするとところを、咳ばらいをしたメタナイト卿に…いや、ここでは提督ってことになるのか…？遮られてしまった。

「今はそんなことを話している場合ではないだろう。さしあたり、カワサキのこれからの身の振り方をどうするかについて話すことを先決すべきだ」

それもそうだ。身寄りもない、お金もない、職もない、身分証明すらできない今の俺のこの状況では、一人で生きていく術なんて皆無に等しい。というか今ここでメタナイト達に見捨てられたら完全に詰む。正直言つて今にも泣きそうだ。

「そこで提案するが、ここは一つ「しれいかーん！ちよつと来てー！大変よ、たいへん！」…今の声は暁か。すまない、少し様子をみてくる。すぐに戻ってくるから、その間カワサキのことを任せただ、では」

そう言つてメタナイトは背中 of 翼をはばたかせながら、颯爽と部屋を出て行った。

「一体なにがあつたんだろ…？ 暁ちゃん大丈夫かな…」

「どうせ、いつも通りたいたしたことじゃないでしょ、全く。過保護なのよ、司令官は」

「…司令官が第6駆逐隊のような小さい子たちと一緒にいるとき、何となく叢雲ちゃん機嫌が悪くなっているよね。やつぱり司令官と楽しく遊んでいるのを見ていると羨ましがってるんじゃない？」

「なっ…、そんなわけないでしょ!! 吹雪! 急に何を言い出すのよアンタは!! 私はまだ、仮にも軍に属している身でありながら、あまりにも浮かれた気分でいられるのは迷惑だし、下手をすると緩んだ雰囲気も鎮守府全体にも—!」

「あーはいはい。そうだね、叢雲ちゃんの言うとおりだね。ごめんね、お姉ちゃん勘違いしていたよ」

「ちよ、ちよつとこちら! ちゃんと真面目に聞きなさいよ!」

な、なんか盛り上がっているな…こっちは完全に蚊帳の外だ。ていうか、今黒髪の子が自分のことをお姉ちゃんって言っていたけど、この2人は姉妹ってこと? 全然似てないな。ぱつと見た感じだと年齢も同じぐらいのような気もするが。まあ、今は気にしなくてもいいか。聞いておきたいこともあるし、とりあえずここは

「あのくちよつといいく?」

「何よ!」

「さつきから君たちが司令官、司令官って呼んでいるのはメタナイト卿のことだよねくどうしてメタナイト卿がこの鎮守府の提督なのく?」

2人に話しかけてみることにしよう。銀、いや薄い水色になるだろうか、そんな色彩の薄い髪の色をした叢雲って子は、短めな黒髪をした吹雪っていう子にからかわれたことで、なにやら興奮が冷めてなさそうだが、ここは話を聞いてもらうためにも、一旦気持ちを落ち着かせてほしい。

「まあ、確かに先ほどの司令官の話だと、この世界のことについての説明はあつたけど、司令官自身のことについては何も触れていなかったよね」

「司令官らしいといえば、司令官らしいけどね」

もつと自分のことについて話してくれてもいいのに、と言う叢雲は少し寂しげな様子をしていた。まあ、確かにメタナイトはどちらかというと寡黙なタイプだからな。あの世界の住人にしてはものすごくクールであり、強く、賢く、情にも篤く、通称世界一カツコイイ一頭身だ。そこに異論は全くない。

それにしても、2人の様子を見ている限りだと、ここにいる艦娘には随分慕われていそうである。少し意外だ。そりや、メタナイトはゲームの中とかでもカリスマ性を備えていて、部下から尊敬を集めていた。だが、冷静に考えて一頭身と人間、正確には人間でないにせよ、ヒトの姿をした艦娘が同じ場所で生活しているのだ。考えれば考えるほど、不思議感が増すばかりである。

「でも、メタナイト卿が君たちの提督かあ。あんなナリで提督になれるってどう考えてもおかしいよね？みんな集団催眠術にでもかかって、たぶらかされているんじゃないの？ハハハ」

だから思わずそんなことを口走ってしまった。自分としては冗談めかして言ったつもりであり、馬鹿にする気など毛頭なかった。しかし、俺の言葉を聞くと2人は目の色を変えてこう言い放った。

「今の発言…即刻取り消しなさい。でないと絶対に許さないわよ」
「さすがに今のは聞き捨ててはおけないかな」

空気が即座に凍りついた。どうも俺は地雷を踏んだらしい…

第3話

雰囲気がこれでもないかというくらい、重苦しいものになった。ヤバい。あまりにも軽率にものを言ってしまった。正に、口は禍の元である。後悔の2文字しか浮かんでこない俺をよそに、尚も2人は続けてこう言った。

「貴方と、司令官が元々居た世界で、どういう関係だったのかは分からないけれど、あの司令官よりもこの国のためを思い、身を粉にして頑張っている人は少なくとも私の知る限りではないわ」

「それに私や叢雲も含め、この鎮守府のみんなは本当に司令官には良くして貰っています。そして、そのことに感謝していない人はいません。そんな司令官に対する誹謗中傷は私たちに対する最大の侮辱と受け止めます」

アカン。もう、目がマジだ。この後の返答によっては命の危険すら覚えてきた。さつきここで見放されたら野垂れ死ぬ、という風なことを思ったりもしたけど、なんなら今ここで死んでしまえば、俺にできることは限られてくる。というか、一つしか思い浮かばない。そして、それを実践するしかない。それは何かって？そりゃもちろん――

「ヒイイ〜!!今のは冗談のつもりだったんだよ〜言うなればギャグよ、ギャグ〜!ギャグのつもりで言ったんだってば〜。ゴメエンなさい。謝るし、もう二度と言わないから許してくれよ〜!ウウウ〜」

恥も外聞もなく、ひたすら泣いて謝ることだった。まさかこの年齢にもなって、自分よりも全然年下の子にこんな謝り方をしてしまうとは…自分が情けなさすぎる。あれ、でも艦娘って年齢の概念はないんだっけ?いや、そもそも俺は今カワサキであるから、自分の年齢も何もないけど。そういえば今はカワサキの年齢になっているわけか。もつともカワサキの年齢なんて知らないが。

って、今はそんなことはどうでもいい。これで許してもらえなかったら、本当にどうしよう。さすがに殺されるなんてことはないと思

たいが、そのまま見捨てられて、途方に暮れること待たなしである。俺がこんな風に絶望しているさなか、彼女たちは一つ息を吐き、

「司令官の言っていた通り、悪い人ではなさそうだね。でもって調子に乗りやすい性格、これも司令官の言う通りだね」

「ま、これに懲りたら軽はずみな発言は控えることね」

何事もなかったのようこう答えた。先ほどの緊迫した雰囲気とは一転、メタナイトと話していたときの様子に戻っていた。え、え？ どういうこと？ そんなに俺の号泣謝罪が効いたってことか？ それにしたって変わり身速すぎじゃない？ なんかこうドツキリにでも引つかかったような心境でいると、

「どうだ、2人とも？ 警戒は必要ありそうか？」

「全くないですね！（わね）」

いつの間にやらメタナイトがこの場に戻ってきていた。

「司令官の言うことを疑っていたわけではないですけど、自分の目でも判断するに越したことはないですからね」

「そもそも他人の情報を鵜呑みにはするなって、いつも司令官自身が散々言っているわけだし、私たちがこんな対応するのはアンタが原因でもあるでしょう？」

「これは一本取られたな。かくいう、私自身もカワサキに姿を成り済ました全くの別人の可能性もあるのではないかと考え、最悪の場合敵側にそのような能力を持った者がいて、スパイを送り込んできた、というケースもあるかと考えたが…敵側もこうもボロを出しやすいヤツを差し向けることはないだろう。今のが演技といった風にも到底見えなかった」

カワサキの姿に成り済ました全くの別人というのはビンゴだし、何気に失礼なことも言われているような気はするが、それはさておき。…つまりはだ。先ほどまでの会話は俺を試すための茶番だったというわけか。…………

「もお〜〜!!なんだよ〜! 本当に心臓止まるかと思ったよ〜いくら何でもあんまりだあ〜! 酷すぎるよ〜!」

「悪かった、許してくれ」

「こつちとしては本当に何気ない発言だったのにいゝ！だって、だって球体の身体をして、仮面にマントなんて怪しさ満載だと思うだろ〜普通う〜」

「確かにそれは言えているかもしれないけど、裸エプロン姿のアンタが言ってもまるで説得力に欠けるわよ」

「はは…叢雲ちゃんの言い方はキツイけど、それに関しては全面的に同意かな」

そういえば、そうだった。カワサキの格好ということは叢雲の言う通り、裸エプロンに他ならない。ただ、言葉に出されるとすごく恥ずかしいのだが、格好そのものについてはそこまで変だと思えないのだ。慣れてしまっている自分がいることにコワイ。もうカワサキに完全に染まってしまったのだろうか。そして、叢雲のことをキツイと言っている吹雪だが、先ほどの責め方といい、正直お前も十分キツイ。というか、なんならコワイ。

「じゃあ、さつきメタナイト卿を呼んでいた艦娘も、あれも台本通りだったってこと〜？」

「いや、あれは本当に助けを求めているから私を呼んでいたのだ」

「そういえば、暁ちゃんは結局何があったんですか？」

「フリスビーで遊んでいたところ、高い木に引っかけてしまって、とれそうにもなくて半泣き、といった具合だった」

「想像以上にしようもない理由だったわね…」

「まあ、そのフリスビーは確か司令官が暁ちゃんたちにあげたものだったし、司令官からもらったものは特に大切にしていたからしかたないよ。それに、そのおかげで私たちがタイミングよく切り出すこともできたし」

クソ〜！その暁とやらのせいで、俺はとんでもない目にあっていたというわけかい。みてるよ暁いゝ次に会ったときはリベンジを決めさせてもらうからな。といってもまだ、一度も会ったことないから顔すらわからないけど。

「それはさておき本題に入ろう。カワサキ、先ほどは言い損ねたが、そなたはこの世界に来たばかりで、恐らくあても全くないだろう。そこ

で提案するが、そなたが嫌でなければ、しばらくはこの鎮守府で生活するというのはどう「お世話になります!!」：よし、決まりだな」
もちろん即答だよ。何が何でもyesに決まっている。当然のよう
に力になってくれようとするメタ様やっぱり最高！宇宙一カッコ
イイ一頭身です、もう一生ついていきます、ハイ。

「そうと決まれば鎮守府の皆にも連絡せねばな。叢雲、大淀に都合が
つく者だけでいいから、鎮守府にいる者を大広間に集めるよう伝えて
くれ。それから会場の準備も頼む。私は工廠に来るよう頼まれて、そ
れで今から行かなければならないから、そうだな：現在の時刻が一六
〇〇だから、集まるのは1時間後の一七〇〇頃でいいだろう。それま
で吹雪はカワサキにここの鎮守府の説明をしてやってくれ」

「了解」

「分かりました！」

「ではカワサキ、また後で会おう」

こう言うと、メタナイトと叢雲はこの場を去っていき、俺と吹雪だ
けが残った。とりあえず1時間後には、呼べるだけの鎮守府にいるメ
ンバーとの顔合わせが始まるらしい。言うなれば俺が艦娘に対して
自己紹介をするわけだな。そう思うと少し緊張してきた。いつに
なっても自己紹介というのは不思議と慣れないものである。

「あのーカワサキさん」

「ん？あゝ鎮守府の説明だね〜よろしく〜」

「それもあります、まず言っておくべきことがありますて…」

吹雪は少しきまり悪そうな表情をしながら、俺に話しかけてきた。
なんだろう？何か言い出しにくいことでもあるのか？一体何だろう、
そんな風に思っていたら

「本当に、すみませんでした！」

大きな声で謝られた。え、どうして？

「カワサキさんを試すようなことをして、しかもあんな脅迫じみた物
言いの仕方になってしまって、本当にごめん

なさい！」

「なあんだ、そんなことか。もう終わったことなんだし、別にいい

「じゃないか〜」

「とは言っても、初対面の方に対して本当に失礼なことをして…」

「俺にも非はあったんだし、お互い様だよ。今後は仲良くしてもらえればそれでいいからさ〜、ね〜？吹雪さ〜ん」

「ありがとうございます…カワサキさんは優しいんですね！」

優しいのは君の方だよ。あー良かった。あの時は本当に怖かったけど、ここまで気にしてくれているあたり、吹雪って礼儀正しくて良い子なんだなあと切に感じた。こんな子を怖いと思うなんて、全くどうかしてるぜ！吹雪ちゃん、最高じゃー！

「じゃあ、改めてこの鎮守府の説明をよろしくお願いします〜す」

「はい、こちらこそよろしくお願いします〜！」

うんうん、吹雪とはもう仲良くなれそうだ。そうだよな。どんな組織に属するのであれ、良好な人間関係は進んで築いていくべきだよな。今にして思うと、前世の職場ではそうだったことには気をまわさなかったことも、会社でうまくやれなかった原因の1つになっていたのかもしれないな。よーし、今からなら幸先よくスタートを切れそうだぞ。早速、自分から話しかけてみてコミュニケーションをとっていかないとな。

「そ〜だ〜。さっきはうやむやになったけど、結局メタナイト卿…司令官はこの鎮守府ではどうなの〜」

ひとまず、気になっているところを聞いてみた。さっきの発言は俺を試すようなものだったらしいし、本心はまた違うのだろう、そう思っていた。ところが、吹雪は

「え？司令官に関してであれば先ほどの私や叢雲ちゃんの話の通りですよ。」

え…なんか雲行きが怪しくなってきたような…

「じゃ、じゃあ、司令官の悪口を言おうものなら…」

「はい、私も含め艦娘全員が黙っていませんね。言った人はただでは済まないことは間違いありませんけど…？」

なにかおかしいですか？とでもいいいたげそうに、至極当然のようにそう答える吹雪。その表情は柔らかいが、目は全く笑っていない

た。訂正、やっぱりフブキサシコワイ。他の艦娘も差はあるかもだけ
ど、大体吹雪と似たような感じなんだろうな…ああ、なんか不安に
なってきた。俺、うまくやっていけるかな…

第4話

「へえ〜。この鎮守府にはそんなにたくさんの艦娘がいるんだ〜」

「はい。新しく着任した人といえば、みんなの顔と名前を覚えるところから始まるんですが、それがまず一苦勞ですね。もつともわたしたち艦娘の場合は同じ姉妹や、艦だったところに関わりの大きかった艦娘同士であれば、初対面でもお互いのことが分かったりするんですよ」

「艦なのに姉妹とかつてあるの〜?」

「そうですね。艦って、大抵モデルとなる艦を参考にして造られるんですけど、そうやって後追いで造られた艦はそのモデル艦の型に分類されるんですよ。モデル艦として最初に造られた艦は通称1番艦やネームシップと呼ばれ、その1番艦の名前がそのまま型の名前にもなります。例えば、私は吹雪型の一番艦吹雪ですけど、同じ吹雪型の子たちは私の設計図を基準にしている、基本性能も大体同じなんです。そして艦に関して言うと同じ型であれば、一般に姉妹とみなされるんですよ」

「そして、設計された順に2番艦、3番艦…ってなるわけかあ〜。ということは吹雪さんは長女だったんだねえ〜」

「必ずしも設計順となっていないかといえば、そうでもないらしいんですが、基本的にはそうですね」

「それにしても吹雪さんや、叢雲さんのような小さい子が戦場に出て戦うなんてねえ〜。本当にたいしたもんだなあ〜」

「私たちと同じぐらいのような子は他にもたくさんいますよ。なんならもつと小さい子だって少なくないですし」

「ええ〜本当に〜!?そんな小さい子たちですら国のために戦わないといけないほど物騒な世界なのかあ…」

「まあ、それが私たち「艦娘」の使命でもありますし」

早速俺は吹雪から、この鎮守府、そして艦娘に関しての説明を聞いていた。あるときは不思議に思ったり、またあるときは感心したり、またあるときはあつけにとられたりしていた。改めて聞くとなんかすごいな…。いくら子供の姿であろうと、そこは艦娘、軍人として

の魂は常に持ち続けているというわけか。

「ただ、私たちがその力を十分に発揮するためには欠かせない要因がいくつかあります。その中でも一番重要といってもいいのが「提督」の存在ですね。その提督：私は司令官と呼んでいますが、司令官との絆が深くて、お互いの信頼があればあるほど、より私たちは力を出せますし、その逆もしかりです。そして私たちの司令官というのが…」

「メタナイト卿というわけねえ。でも、やっぱり意外だねえ。提督って鎮守府で一番偉いんだろ？それを違う世界からきたメタナイト卿がなるなんてねえ」

「私も最初に会ったときは驚いちゃいました。私たち駆逐艦よりもずっと小さくて、それこそぬいぐるみにしか見えない存在に声をかけられたので、思わず腰を抜かしましたね」

まあ、そうなるよなあ…。だってカービーと同じサイズだろ。カービーって公式で体長20cmぐらいだったはずであり、それと同じ大きさってことは…うん、やっぱ人形の類にしか思えないのも無理ないわ。

「ところで、今吹雪さんが言った「くちくかん」ってなあに？」

「艦にもいくつか種類があるんですね。みんな大きさだったり役割が違ったりするんですけど、その数ある艦種の中の1つに駆逐艦と呼ばれる比較的スケールの小さい艦があります。そして私は駆逐艦吹雪としての性能を持った艦娘というわけです」

「なるほど、駆逐艦かあ。俺で言えばコックカワサキのコックにあたるようなもんだねえ」

「ちよつと違うような気が…でも、コックカワサキってことは、やっぱリカワサキさんは料理人だったんですね！ひよつとしたら、ただ、裸エプロンの格好が気に入っているだけの変な人なのかな、とも少し思っちゃいました」

「ヒドいなあ」

いい加減裸エプロンは許してくれ。あの世界は服を着ているヤツが少数派なんだから。そういえば、前世では料理なんて全然してこなかったけど、コックカワサキになったってことは料理の腕前も上がった

てそれなりにできたりするのだろうか。でもこのしゃべり方はアニメ準拠だし、それだとメシマズになるんだよねあ…

「じゃあ、例えばその駆逐艦の子だったら、みんな小さい女の子の姿をしているってこと〜？それにもっと大きい艦の性能の持ち主の艦娘だったら、もっと大きい姿をしているのかなあ〜？」

「基本的にはそうですね。例えば、戦艦と呼ばれる艦娘だったら身長も高く、大人っぽい人ばかりですし…あ、ちょうどあそこに戦艦の金剛さんがいますよ」

「へーい！ブツキー！お疲れ様デース！そして…エーツト見たことのない生き物がブツキーの隣にいるネー！ブツキーのお友達デスカー！？」

声が出た方向に顔を向けると、確かにそこには吹雪や叢雲よりも明らかに背が高く、そしてテンションも高そうな艦娘が向こうからやってきて、俺たちに気づくなり声をかけてきた。

「金剛さん、こんにちは。こちらの方は司令官と同じ世界からやってこられたんですよ」

「Ohー！テイトクと同じ世界の人デシタカー！ワタシは金剛とイイマース！ヨロシクネー！」

「カワサキだよ。こちらこそ、よろしく〜」

これはまた、随分と社交的な艦娘だな…でも確かこのキャラも見たことがあるような気がする。そして語尾を伸ばすところとか、どこことなくしゃべり方がカワサキこと俺に似ている。それが理由ではないけれど、この艦娘、金剛とも仲良くやれそうな予感がしてきた。

「この後大広間で、カワサキさんの紹介があるんですよ」

「ナルホドー、さっきの放送はそういうことデシタカー。それなら楽しみにしているネー！カワサキー！」

「うん、俺もみんなの自己紹介を楽しみにしているよ。それじゃあ〜金剛さ〜くん、また後でねえ〜」

「自己紹介をするのはカワサキさんだけだと思いますけどね」

そして少し言葉を交わして、金剛とは別れていった。そしてその後艦娘とちよくちよく出くわして、会話をしたりした。

×××

「わー、全身がオレンジ色っぽい！毎日みかんでも食べ続けたっぽい？夕立と時雨もみかんは好きっぽい！」

「し、失礼だよ、夕立。提督の知り合いに対して」

「毎日みかつかあ、それだけ食べ続けたら、みかんを使った新しいメニューもたくさん思いつきそうだよねえ」

「論点はそこでもいいんですか…」

「…こりやまた、特徴的なのがやってきたね。提督と同じ世界から来たって言っても、見た目は全然違うじゃん。ビックリしたよ、ねえ、大井っち」

「俺も最初にここに来たときはビックリしたからお揃いだねえ〜ハハ」

「ちよつとアンタ！北上さんとお揃いが許されるのは私だけよ！適当なこと言わないでくれるー！」

「じゃあ、その、大井さんだっけ〜？アンタとお揃いでいいよ〜ハハ」

「なんで上から視線なのよ！いちいち腹が立つわねコイツ…！吹雪！一緒にいるならちゃんと教育しておきなさいよー！」

「え、え〜〜!?そんなこと言われても〜！」

「で、その場所ではいくら食べても料理がなくならないから、道に落ちている料理を食べながらゴールを目指して走り続ける、そんな競技が俺の世界にはあるよ〜」

「夢のような場所ですね…！ぜひ行ってみて、その競技に参加したいです!!」

「赤城さん、落ち着いて。涎が垂れてるわよ」

「そういう加賀さんも喉を鳴らしていますよ」

「ふ、二人とも！そんな道端に落ちている料理を食べていたら、普通お腹を壊しますって！」

「この2人ならどんな料理を出しても、喜んで食べてくれそうだね。」
俺の考えた新メニューのちょうどいい毒見役になるかも」

「うおい！カワサキー！自重しろー!!」

×××

と、まあこんな風に会話をしたりしていると（吹雪は主にツツコミ役で、たまにキャラ崩壊していた）時間は刻々と近づいてきた。それにしても艦娘って色々な人がいて、顔や体形もそれぞれ異なっているが、総じて言えるのは見目麗しくて、スタイルもいい人ばかりってことだな：前世の俺だと、こんなに多くの美人たちと話す機会なんてまじなかった。

その割には自分でもいうのもなんだが、スムーズに会話をこなせていたような気がする。やはりカワサキであるからだろうか。だが、この後そんな美人ばかりの前で自己紹介とききたもんだ。そう考えると少し不安になってきた。

「みんなの前でちゃんと挨拶できるかなあ。ちよつと緊張するねえ」

「緊張って、どの口が言うんですか。なんだか私は疲れましたよ。こういう役回りは普通、叢雲ちゃんや、霞ちゃんとかのはずなのに：」
「だったら、吹雪さんは昼寝でもしてきたらどうかなあ。今日は天気もいいし、きつと気持ちいいよ」

「もう、ツツコミませんよ：さて、時間も時間ですのでそろそろ大広間に向かいますよ」

あれ：俺、何かおかしいこと言ったっけ：？少しぐったりしている様子の吹雪だったのだが、そこはさすがに軍人である、すぐに持ち直したようだ。やはりしっかりしているな。差し詰め長女の名も伊達ではないといったところか。こうして吹雪は表情を引き締めなおす

とともに、メタナイトや艦娘たちが集まるであろう大広間へと案内していった。

第5話

「敬礼!!」

勇ましい声とともに全員が全員敬礼の構えをとる。やはり一つの軍である以上、こういうときの呼吸は一切乱れがない。どことなく緊張感を漂わせる中、ついに俺が全員ではないらしいが、艦娘に向かって挨拶をするときがやってきた。

「各位、本日もご苦勞であつた。今日こうして皆を集めたのは、既に知っている者もいるかもしれないが…この鎮守府に新しく加入することとなつた者についての紹介をする。ではカワサキ、前へ」

メタナイトから促されて俺は壇上の中央に向かつて。こういうのは最初が肝心だ。艦娘たちの表情は真剣そのものだし、俺もビシッと決めないと…そして中央の位置に立つや息を吸ってこう言った。

「カワサキだよ〜。今日からこの鎮守府で暮らすことになつたので、よろしくね〜」

ダメだ…この厳肅とした空気を壊さないように、引き締まつた挨拶をしなければならなかつたのに、語尾は伸びるし、敬語すら使えていない…心なしか艦娘の皆さんも、少し不審の顔でこちらを見ているような気がする。しかし、そうなるのも無理はない。ただでさえ異形な姿をした生き物が、急に自分たちの生活の場に入ってくるというのに、聞く側によつてはこちらを馬鹿にしてるかのようなしゃべり方なんでもんな。

…どうしよう。ここから挽回する手段は、えーつと…

「そ、そくだ〜!メタナイト卿〜このまま終わるのも味気ないんじゃないかなあ〜。だからこの場を使って、みんな色々俺に質問するつてのはどうかかなあ〜?疑問に思っていることとか、聞きたいことがあるらば何でもいいよお〜」

「そうだな。この場は何も重要会議などといった類ではなく、飽くまでもカワサキとこの鎮守府にいるものの顔合わせが目的だ。硬い空気は必要だろう。それに、これからお互いのことを知っていくためにも、そのような問答があるに越したことはない。皆ももつと楽にし

ていい。あまり多くなつても埒があかないだろうから、とりあえず一人一問ずつにしよう。何かカワサキに質問がある者は挙手をして、名前を呼ばれてから発言するように」

だからいちいちあなたの発言は硬いんだよ。でもいずれにせよ、こちらの提案を受けてくれるあたり、さすがメタ様である。するとちらほら手は上がり始めて、そのうちの一人をメタナイトは指した。

「よし、では大淀」

「はい。その…カワサキさんは、提督と同じ世界からこの鎮守府にお越しになつたと伺っておりますが、こちらの世界に転移した原因や、前後の状況について何か把握されていることはございますか？」

「気がついたらベッドに寝っ転がっていたんだよ。こつちに来たこととの心当たりは正直思いつかないねえ。転移する前のこともよく思い出せないんだよ。もしかしたら、何かの拍子で死んだんじゃないの？？そしたら生き返つて、こつちの世界にやってきました、みたいな？アハハ」

「そ、そうですねか…わかりました、ありがとうございます…」

おお、我ながら上手く受け答えができたんじゃないだろうか。そこまで？も言っていないし。今質問をしてきた、眼鏡をかけていて、いかにも仕事ができそうな感のある艦娘…大淀は、若干ひいているようではあるが、まあそこまで気にしなくてもいいだろう。

「では、他に。長門」

「聞いているかもしれないが…我々艦娘は普通の人間とは外見は似ていても、身体の性質や、戦闘能力等中身は全く持つて違う。それらが原因で、外部の人間が我々を怖がつたりするのも珍しくはない。中には偏見を持つて蔑んだりするような輩もいるが…そういう謂わば腫物のような存在である私たちと生活することについて、抵抗があつたりすることはないか？仮にあつたとして、それが理由で我々に危害を加えようとするのであれば―」

「へえ～そんなに違うの？？どれぐらい違うのかなあ～ひよつとして、メタナイト卿とカービーぐらい？？なんか少し興味がわいてきたねえ。それと、質問の答えだけ…え～つとなんだつたっけ？悪い

けど、もう一回聞いてもいいかなあ〜」

「いや、今の反応で大体は把握した。こちらこそ、無礼な物言いをしたことについて謝罪する。なるほど、さすがは提督と同郷のもの。少し脅迫まがいな聞き方をしたにも関わらず、こうも物怖じしないとは…」

やたら威圧感を感じると思ったら、やっぱりそういうことか…？つか全然平気じゃねーよ。この長門っていう艦娘、やけに背が高いし、風貌や佇まいから並々ならぬ迫力が伝わってきたっつーの。特に最後の方めちやめちや怖かったからな？足なんかかくかく震えていたし。

でも、受け答えはスムーズにできるんだよなあ。やっぱりカワサキ効果？心の中まで完全にカワサキになるのも、そう時間はかからないんじゃないだろうか、この分だと。

「他に質問がある者―漣」

「はーい！カワサキさんとご主人様はいったいどういった関係で？」

「へ？俺にご主人様なんていないよ〜」

「あ、いえ、そうではなくて、提督とカワサキさんについての間柄を知りたくて…」

「俺とメタナイト卿があ〜。やっぱり仲間かなあ〜。一緒にカービイの手助けだつてすることもあ〜るし〜」

「その…カービイさん？つていうのはカワサキの旦那たちと同じ世界の住人ってわけですかい？」

「そ〜だよ〜。俺の友達なんだけど、まん丸で、君の髪の色みたいにピンク色の身体をしていて、食いしん坊で、ダンスが得意で、歌が下手で…」

「話がかワサキのことから脱線してきているからそこまで。では他に

―川内」

あらら、せっかく話が盛り上がってきたのに残念。まあ、途中から完全にカービイの話になっていたしな。そして、この漣つて子も割と話しやすいぞ。ただ、いつの間にか自然と、俺を旦那呼ばわりしていたことについてはどうなんだろう。デデの旦那じゃあるまいし。

「川内でーす。単刀直入に聞くけど…カワサキさんは夜戦って好き？」

「ヤセン？そんな料理があるの？簡単そうだったら俺にも作れたりするかなあ〜」

「いやいや、今のは料理の話じゃなくて、夜に戦闘するって意味で聞いたんだけど…」

「銭湯？それもいいねえ〜だんだん寒くなってきたし、あつたかいお風呂は気持ちいいよお〜。それで気分がよくなってきたときに料理を出せば、味なんて関係なく注文してもらわれるかも〜」

「料理から離れんかーい!!それに料理を出す側なら、味には常に注意しろーい!!」

今質問した川内…その雰囲気から結構おちやらけた艦娘かと思っただけど、言っていることは案外まともだな。少し意外な気がした。うん？俺がまともでなさ過ぎて相対的にそう思えるだけだつて？おつと、それ以上はやめなさい。だつて失礼だろ。俺にも、川内にも。

「それでは他に「はい!!」では朝潮」

「カワサキさんは先ほどから、司令官のことをメタナイト卿と呼んでいらつしやいますが、そもそも司令官は元の世界ではどのような方だったの？「カワサキに關係する質問ではないから却下だ」そ、そんなあ…」

自分のことは隠しておきたいだけだろ。そもそも顔(かわいい)すら隠しているしな。今の質問をしてきた、小柄な体格の真面目そうな子…朝潮も少ししよげているぞ。さつきから熱心に手を挙げていたもんなあ…かわいいそうに。

なにはともあれ、なんだかんだでここまでの問答は順調といつてもいいんじゃないだろうか。この自己紹介前でも、ある程度艦娘と話せたこともあるし、コミュニケーションの部分の問題ないと言つてもいいと思う。だつたら、この鎮守府で暮らすのはそんなに難しいことではないんじゃないか…

「よし、時間もそろそろ押してきたので、次の質問を最後としよう。最後に何かカワサキに聞いておきたい者、挙手」

「はい」

「よし、鈴谷」

今度はいかにも今どきの若者って感じの艦娘が指された。この艦娘は鈴谷っていうのか…

「ぶっちゃけこれは提督にも含めて聞きたいんだけど、カワサキは今後この鎮守府でどう暮らすわけ？カワサキ自身、具体的になんかやりたいこととかはないのー？」

第6話

鈴谷にそう言われて、ハツとした気分となった。やりたいことか：コックカワサキである身としては、料理人として生きるのが自然な流れなんだろうけど。

「まだここに来たばかりでこんなこと言うのもなんだけど、カワサキ自身なにもしないってわけにもいかないっしょー。だったら、なにかやりたいことがあつて、それができる環境がこの鎮守府にすでにあるなら、すんなりことは進むよねー。だからまずはカワサキの希望を聞いてみた方がいいと思うわけよ。まー今まで聞いた感じだと料理人なんだろうけど、じゃあ、料理人としてどうしていくかの具体的な話はまだ何決まっていけないわけじゃん」

「ですが、鈴谷。まだ、ここにきて1日目なわけですし、そのようにすぐに決めることもないのでは…」

「熊野。確かに早い気もするが、鈴谷の言う通り、いずれは決めなければならぬことではあるからな。カワサキ、そなたの希望はどういうものだ？なんとか極力応えるようにはする。やはり、料理人として自分の店を出したいとかか？」

初対面の相手をなんの抵抗もなく呼び捨てとは…うん、この鈴谷という艦娘はやはりイメージ通りだなーと、思いきや、なんかいきなり核心に迫られた心地がした。案外鋭く、思慮深いところがあるんだな…まあ、そんなことは置いといて、今後生活していくにあたってやりたいことか。あわよくばこのままずるずるいき、何の仕事とかもせず生活できるかと内心思ったりしたが…そうは問屋がおろさないか。だったら、決めるしかないか。となると、メタナイトの言う通り料理人になって店を出してしまうか？料理なんてまるつきり自信がないし、店の出し方なんて全くわからないけど、メタナイトも手伝ってくれるだろうし、ここは軍だからそれほど料理にうるさい人もいないだろうし、ここは流れに任せて…

「できたら、それが一番いいねえ〜！店を出してじゃんじゃん稼ぐよ〜」

つい、調子に乗ってそんな発言をしてしまった。すると

「お、大きくでたねえ。ただ、うちの鎮守府は昼には間宮さん、夜は鳳翔さんが店を出しているし、他にも料理が得意な艦娘は結構いて、一筋縄ではいかないよー」

鈴谷にこのように返された。それに賛同する艦娘も大半を占めている。

「彼女らが出す料理はどれも逸品だからな。彼女らに料理を習って腕を上げている艦娘中にはいる。そのせいもあってか、ここにいる艦娘たちは舌が肥え、並みのもものでは満足できなくなっている者も少ないのかもしれない」

「私は最低限の質が保証されていて、後は量があれば基本的に満足できます！もちろん、味がいいことに越したことはありませんが」

「赤城さんのような人もいるけど、基本的には美味しければ満足できるわよね」

赤城はまあ、置いておくことにして：：そうか、そんなに味にうるさい連中が多いとは。しまった、安易に答えるんじゃないかった。

「え、そうなのお。：：てつきり俺の店だけしかなくて、何の努力もなしに繁盛できると思ったのになあ」

「：：そこは努力しろ！！！！」

マジかよ：：うーん、そうなると難しいか：：それにしても、ほとんどが初対面であるにもかかわらず、その場にいる艦娘全員から、一斉につっこまれてしまった俺っていったい：：

「どちらにしても、来たばかりのカワサキが何の準備もなしに、いきなり店を開くこと自体無理があるだろう。そこで考えていたのだが：：間宮。確認するが、デザートといった甘味ものに関しては、現在伊良湖が中心となって作っている、それで合っているな？」

「ええ、そうですね。私もお客が多いときはお手伝いしますけど、ほとんどの場合、伊良湖ちゃんか一人で切り盛りしていますよ。それに腕で言えば、私なんかでは到底追いつかないほどです」

「な、なにをおっしやるんですか!?!間宮さん！私なんかでは間宮さんの足元にすらおよんでなど：：」

間宮、鳳翔つていう艦娘の他に、伊良湖つていう艦娘も店で料理を出しているのか。話を聞く限りでは、どうも伊良湖は間宮の下で働いているみたいだな。

「謙遜しなくていいのよ、伊良湖ちゃん。それに自分でも店が持てたらしいなあみたいなこと、この前駆逐艦や、海防艦の子にも言っていたじゃない」

「き、聞いていたんですか!? あれは、その、言葉の綾というか…」

「遠慮など不要だ。私もその話を耳にしたとき、何か協力はできないかと考えていた」

「司令官は甘いものが大好きだものね!!」

「しーっ暁。一人前のレディなら、あまりそういうことを大きい声で言うものではないよ。司令官の機嫌を損ねてしまうかもしれない」

「えっ…響…そ、そうなの!? ご、ごめんなさい! 司令官!!」

「…別に気にしていないから謝らなくともよい」

今、騒いだのが例の暁か。確かに小さい。そして子供っぽい。響つて呼ばれた落ち着いた子が隣にいることもあって、余計幼くみえてしまうな…

「そこで提案なのだが、今回伊良湖とカワサキ共同で、新しい店を出すというのはどうだろうか。いつでも店を出せるようにその分のスペースはもう確保してある。他にも色々準備を要することはあり、少し時間はかかると思うが、カワサキの都合もあることだし丁度いい。伊良湖、改めて聞くぞ? 本当に自分の店を持つてみたいかはしない?」

「伊良湖ちゃん、自分の思いを正直に、ね?」

「伊良湖さんなら絶対にうまくいくってー」

「むしろ、店を持たない方がもつたないよー」

「なんなら毎日通う自信があるよねー」

周りの後押し、声援も大きくなってきた。そして伊良湖はついに「す、すみません!! やっぱり自分の店を持つてみたいです!!」

おお、言い切ったぞ。最初の遠慮がちの様子からよくここまで踏み切れたもんだ。独立して自分の店を持つてみたい、か。やはり他人か

ら評価されるほどの確かな実力が自分に備わっているのであれば、どこの世界でも一國一城の主には憧れてしまうよなあ……いや、でもそんな単純な話じゃないな。

大抵は憧れるだけで、決断できるほどの勇氣を持てる人間は一握りだろう。ましてやこんな自分より小さな子が、そんな決断をしてのけるなんて。それに比べて俺ときたら……ホント駄目だな。そんな俺をみて、その胸中を知ったのかどうか定かではないが、メタナイトはうつむいている俺に向かって声をかけてくれた。

「きつかけさえものにしてしまうとしてくれるなら、私はそれを全力でサポートするだけだ。そしてお前はもうこの鎮守府の一員であり、僭越ながら私がこの鎮守府の長だ。部下が勇氣をもつて前進しようとしているのに、後押しできない上司など、それこそ存在の価値はない。もちろんそれは今回に限った話ではない。ケースにもよるが、いつスタートできるかなど、それこそさしたる問題ではないことの方が多い。重要なのはスタートできる自分でいられるかどうかだ。そして私に言われなくとも、お前はすでにそのことに気が付いてるはずだ。だから、後お前に必要なのは断固たる決意のみ。そうだろ？ カワサキ」

こんな不甲斐ない俺に、温かく激励を与えてくれるメタナイト、そして――

「カワサキさん。私はできることなら、カワサキさんと一緒に店を出してみたいです。まだまだ未熟ではありますが、なんとかカワサキさんの役に立てるようがんばりますので……！」

俺のことを励ましつつ、俺の力を欲しうとしてくれる伊良湖。元々自分単独で店を持つとうとしていたのに、こう言ってくれるということは、俺への氣遣い以外の何物でもないだろう。

……本当腑抜けだな俺は。ここまでお膳立てしないと、何も決意できないんだからな。でも腹は決まった。そうだよ、今ここでスタートを切ることになるんの問題があるんだよ。今切ってしまうことが、この時点での最高のタイミングだ。ならば――！

「よくし、デザートが中心なら、いつそのこと新しい店はカフェとして

やっつていこ〜！伊良湖さん、心配することはないよ〜！俺もいることだし、大船に乗ったつもりでいてよ〜」

「カワサキさん…ありがとうございます!!これから一緒にがんばりましょう!!どうかよろしくお願いします！提督も、他の皆さんも本当にありがとうございます！」

大広間に沸き起こる拍手。これは俄然気合が入ってきた。よし、俺もこの波に乗っちゃってみることにするぜ！料理なんて全く自信ないし、お菓子やスイーツにいたっては、簡単なものですら作った経験がない。それでもこの伊良湖さんとなら、何の根拠もないが、必ずうまくやっつていける、そう思うことができた。

そう、まるで最高のタイミングでベストパートナーと巡り会えたかのような気がしたんだ。そして、ここには最高の上司もいる。それに今俺はコックカワサキなんだ。ここでイモを引くようであれば、料理人としての名が廃る。そして、男が廃る。ならばチャレンジあるのみ。もう今は前の人生とは違う人生を歩んでいるんだ。この決意は冷めそうにもない。いや、冷まささない。

「よし、じゃあ新しい店『カワサキカフェ』で天下をとるよ〜！みんな〜開店を楽しみにしていてね〜！」

カービィカフェならぬ、カワサキカフェを築き上げるんだ！この華々しい門出とともに、俺たちの伝説はここから始まるんだ!!新たな人生の幕開け！みんな、応援してくれよな！

「うわ、急に調子に乗ってきたよ…」

「カワサキも一緒…それだけで一気に不安になってくるわね…」

「店の名前からしてもうダメでしょ」

「さっき大船って言うていたけど泥船の間違いじゃない?」

「いくら伊良湖さんの舵が優秀でも…とあったところよね…」

「今からでも伊良湖一人に任せた方がいいんじゃない」

「ホントそれ」

「伊良湖ちゃん…不安になったら、いつでも私に相談してきてね?すぐに駆け付けから」

「及ばずながらこの鳳翔もお手伝いしますよ、伊良湖さん」

「なんでよ〜〜!!ヒドイよ〜〜!!俺の料理を食べたこともないのに、なんでそんなに言われなきやいけないの〜〜!!みんな、今の発言はギャグでしょ!?ギャグだよね!?ギャグだと言つてよ〜〜!!」

「か、カワサキさん！私は頼りにしていますし、信じていますから…」
爆笑している艦娘をよそに、俺を慰めてくれる伊良湖さん。ああ、伊良湖さんの優しさが身に染みる：伊良湖さんマジ天使：ていうか、なんでまだ会って間もないというのに、艦娘からの俺の評価はこんなにボロクソ!?普通に自己紹介しただけだよね！それなのに、この鎮守府の連中ときたら、うう…

「いや、完全に自業自得だろ。少しは自分の言動を振り返ってみろ」
そして、最後にはメタナイトに引導を渡され、艦娘に向けた俺の自己紹介は終わりを迎えていった。ああ、華々しい門出とはなんだったのか。新たな人生はもう、閉幕しそう…

ああカービー助けてくれよ〜カービーカフェに行くからさ〜頼んだよ、カービー!

登場人物紹介

コックカワサキ

本作の主人公。元々は日本の社会人であり、夜中運転していたころを信号無視の大型車に撥ねられて、気づいたら艦これの世界にカワサキの姿で転生。ゲームは下手だがカービィというコンテンツは好きであり、とりわけアニメのファン。転生後はどういうわけか、多分にアニメのカワサキの影響を受けており、しゃべり方はアニメのカワサキそのもの。艦娘からの評価はからつきし（ごく一部を除く）。だが、嫌われるところまではいっていないということが、彼にとっての救い。今後の評価がどうなるかは本人次第。前世では艦これは未プレイということもあり、艦これの知識はほんの少ししかない。尚、料理の腕前は…

メタナイト

カワサキが暮らすことになった鎮守府の現提督。結構長く勤めている。今まで上げた戦果は数が知れない敏腕提督。艦これの世界に来た経緯は本人しかわからない（中には知っている艦娘もいる?）。基本ゲーム版の設定であり、スターアライズまでに起きたシリーズでの出来事は全て経験している（本人が出番のなかった作品を除く）。カワサキが自分のことをメタナイト卿と呼ぶことについては、疑問を感じつつも触れようとはしない（ひよつとしたらその呼び方が気に入った可能性?）。全艦娘からの評判はウルトラスーパーデラックスであり、大きく分けて心酔している者と、なっている者がいる。もともと恋愛感情を持つ者はさすがにいない、多分。初期のころからいた艦娘の言葉によると、着任以来父性が段々と強まっているらしい。

吹雪

ここの鎮守府の初期艦であり、艦娘の中ではメタナイトとは一番の長い付き合い。本人曰く、司令官のことを最も理解しているのは自分

であるとのこと。鎮守府内での顔は相当広く、周囲から親しまれている駆逐艦のリーダー的ポジションにいる。今後の出番は今のところ未定。

叢雲

ここの鎮守府では吹雪に次ぐ古参の艦娘。本人曰く、司令官のことを最も信頼しているのは自分であるとのこと。これまた吹雪と同様、駆逐艦のリーダー的ポジションにいて、その意識の高さと、実力の高さもあつて周囲から頼りにされやすい。こちらも今後の出番は今のところ未定。

伊良湖

この度カワサキと共同の店を持つことになった艦娘。元々間宮の店で働いていて、その腕前は確かなものであり、お菓子作りに関して言えば、間宮に勝るとも劣らない評判とのこと。したがって、彼女の作るデザートファンは多い。おそらく今後はカワサキと、○ツクとガチャピ○のような名コンビとなってくれるはず(どっちがどっちにあてはまるかは、そんなの言うまでもない)。今後も登場することが約束されている、数少ないキャラである。

第7話

——日が差してきてまぶしい。もう、朝か…今日もいつものように体を起こして、仕事に行く準備をしなければいけない。そう思って顔をあげると周囲をに違和感を覚えた。あれ、俺の部屋こんなんだっただけ…？そうだ…俺はカワサキに転生—いや、今回のケースだと憑依になるのか？何であれカワサキの姿となって艦これの世界に来たんだった。

昨晩は寝るときに、今起こっていることは全て夢であって、再び目を覚ましたら、元の世界に戻っていたりするのではないかと考えた。りしたが、どうやらそんなことはなかったようだ。でも、いつものように仕事に行かなくていいなら、もう少し横になっていようかな…俺が二度寝を決め込もうとしたそのとき

「目を覚ましているなら、起きろ。カワサキ」

誰かに待ったをかけられた。この低い声はメタナイトだ。そう思う思い出した。結局昨日の夜は、メタナイトの私室で寝ることになったんだ。何でも俺ともう少し話をさせてほしいとか言っつて。寝るスペースもまだ余裕はあったし、予備の布団もあるということ。特に断る理由はなかった。俺もそれほど有用な情報は持っていなかったため、あまり役には立てなかったけど。

そして、メタナイトからの一連の話をした後、すぐに眠ってしまったんだよな。新しい環境ということで、精神的にも疲れていたから仕方ないけど、どうせならメタナイトがこの世界に来た経緯も聞いてみればよかったな。まあ、これから聞く機会はいくらでも来るだろうから、そこまで気にしてはいないが。

「ふわあ〜…メタナイト卿、おはよ〜」

「そちら側に洗面所があるから、顔を洗って来い。そうしたら朝食をとりに行くぞ」

メタナイトが指し示した方角を見ると、確かに洗面所があった。部屋自体は全体的に質素だが、トイレやバスルーム等、最低限のものは備わっているようだ。あれ、そういえば俺たちってトイレってするの

？アニメではデデデはしていたけど、俺たちはどうやって…いかん。深く考えるのはよそう。そんなことを知っても、得をする者は誰一人としていない。

「顔洗ってきたよ。じゃあ、早速行こう。場所はどこ？」

「案内するからついてきてくれ。また、初日は色々あつてできなかったが、鎮守府内の案内もしなければならぬ。そこで今日行う予定なのだが、それでいいか？」

実際昨日は結構バタバタしていたんだよな。自己紹介した後は自由時間に過ごせるかと思つたら、鎮守府に新しく加入するための手続きをする必要があつた。そしてまた、この手続きがそれなりの量であり、一言でいえば、大変だつた。

まあ、ここは軍部施設だし、そういうときに準備する書類とかに、時間を要さざるを得ないのも仕方のないところだろう。一方提督であるメタナイトは執務に時間をとられてしまう。だからなんやかんやで、メタナイトと話ができたのも結構遅い時間だつた。

「うん、いいよ。メタナイト卿が直々に案内してくれるの？」

「本来ならば、そうしなければいけないところではあるが…今日はなかなか時間の都合がつきそうにない。すまないが、案内役の艦娘を頼んであるから、その者と一緒に鎮守府内を回ってほしい」

「忙しいならしょうがないよね。謝ることなんかないのに」

「いや、忙しいことを理由に、自分の本来すべきことができないうことなど、そもそもあつてはならない。まず、そんな状況を招いていること自体、私の力不足以外のなものでもない。部下である艦娘はよくやってくれているというのに…自分の至らなさを恥じ入るばかりで、もつともつと、しっかりしないといけないところだ」

なんていうか、本当こう、ストイックだな…メタナイトのことを無能だと思つているやつなど、少なくともこの鎮守府の中には一人としていないだろうに。なんならむしろ、それこそ叢雲も言っていたように、がんばりすぎていて、少し心配をしている艦娘も少なくないんじゃないだろうか。

「そつか…大変なんだねえ…」

「仮にも一つの組織の長を務めているわけだからな。規模もそれなりにあり、大変ではない方がおかしーよし、食堂に着いたぞ。昨日も少し話した通り、この鎮守府には、間宮や鳳翔の店だけではなく、一部の艦娘が中心となって、食堂で料理を提供してくれる。間宮の店は昼間、鳳翔の店は夜しか開いていないこともあり、売店などもあれど、朝はほとんどの者が食堂で食事をとることになる。というわけで、好きなメニューを選んで、厨房にいる艦娘に注文してくれ。食堂はここ以外にも複数あり、それぞれ、リーダーの立場にいる艦娘と、その者の下でサポートしてくれる艦娘がいる。リーダーとなる艦娘の担当食堂は月ごとによって変わるが、今月は―」

厨房を見てみると、そこには一人の艦娘と思しき姿が見えた。

「提督、おはようございます」

「大鯨か、おはよう。うん？ここの食堂の担当は、今月は速吸だったはずだが…？」

「今日だけ代わってもらいました。朝食をとった後に、カワサキさんを案内するということでしたから、せつかくなら早めにお会いできればと思ひまして…」

「それで執務室に最も近いこの食堂の当番をすることにしたのか」

「はい、その通りです」

そう嬉しそうに答える。このことからしても、やはりこの艦娘もメタナイトのことを慕っているということがよくわかる。

「急に仕事を押し付けたばかりか、我々の都合に合わせてくれるとは…気を遣わせたようですまないな」

「これぐらい大したことではありませんし、提督の方こそいつも私たちの都合を優先的に考えて、行動をとってくださいます。そんな提督の力になれるのなら喜んで行きますよ。それに、代わってもらった速吸さんに今日の話を話したら、私も提督さんに頼ってもらえるようもつと頑張らないと…といった感じで、気合を入れていましたよ。少し羨まし気にもしていましたし」

メタナイト、本当に人気がすごいな。まあ、メタナイトファンの俺からしたら、それはそれで嬉しいし、なんなら少し鼻が高いまである。

「そう言ってくれるとは嬉しい限りだ。今後とも十分に頼らせてもらうぞ。それでは、今日はカワサキに鎮守府内の案内をよろしく頼む」「はい、お任せください。カワサキさん、潜水母艦の大鯨です。今日はよろしくお願いしますね」

「うん、こちらこそよろしく」

この大鯨という艦娘は、俺にも愛嬌良く声をかけてくれた。うん：この人は間違いなくできた人だ。あんな自己紹介があつた後でも、俺に優しく声をかけてくれる人が、伊良湖さん以外にもいるなんて：：そ
ういえば

「あ、今思い出したんだけど、店を出す準備について何も考えていなかったね。メタナイト卿どうしよくか？」

「物の移動などもあることだし、すぐにカワサキが駆け付けなくてもよい。その場所も最後に大鯨が案内することになっている。それくらい
の時間にはカワサキにも手伝えることがあるだろう」

このメタ様用意周到である。俺が心配することなんて何もなかったな。

「わかったよ。じゃあ、朝食が終わったら大鯨さん、よろしくね」
「そうですね、ある程度片付けが終わりましたら、一緒に鎮守府内をまわりましよう。：：そういえば私残念ながら、昨日カワサキさんの顔合
わせの場に、参加することができなかつたんですよ。ですから案内を
するときにも、ぜひそのときのことを教えてくださいね！」

「そ、そくだね、ハハハ：：」

うん、そんなところだろうと思った。これでまた俺に幻滅する艦娘
が一人増えるわけだな。ははは、そろそろガチで泣いてもいいよね：

第8話

メタナイトは軽く食事を済ませると、食堂を後にした。俺は他になにかすることがあるわけでもないし、この場に残って大鯨さんを待っているとするか。それにしても、いくら朝早いといっても、全然人がいないな。ていうか俺だけだ。艦娘は朝早く活動することはそんなにないのかな。そんなことを考えていたりすると

「「おはようございますー！」」

元気のいい挨拶が聞こえてきた。見てみると数は3人か。差はあれど、全員艦娘の中では比較的小さい。そのうちの一人は昨日俺に質問していたような気がするな。確か…

「3人とも、おはよう。君は確か朝潮さんだよねえ〜」

「あ、おはようございます！カワサキさん！覚えてもらえていたんですね！ありがとうございます！」

そりゃ、質問してきた艦娘ぐらいは覚えているさ。質問者の数も少なかったしな。ただ、残りの二人は分からない。

「そして君たちが…」

「綾波と申します。今後ともよろしくお願いいたします」

「朧です。よろしく」

「私も改めてご挨拶いたします！朝潮です！よろしく申し上げます！」

随分礼儀正しくて、お淑やかそうな子が綾波で、割とサバサバしてそうな子が朧か…え？肩に乗っかているの何？ひよつとしてカニ？

「うん、よろしくね〜。艦の種類で言うと3人はなんなの〜？」

「全員同じく駆逐艦です。私と朧は綾波型になりました、朝潮さんは朝潮型ですね」

「この食堂が駆逐艦寮から一番近いから、大体この食堂に来る艦娘は駆逐艦だよ。まあ、それ以外の艦娘が来ることも、ないこともないけど」

3人とも全員駆逐艦かあ…まあ、予想はしていたが。3人ともしっかりしてそうとはいえ、見た目は幼いもんな。

「みんなはこれから食事?」

「いえ、今週は私たちが食堂を手伝う当番なんですよ。朝の自主訓練を終えて、丁度いい頃合いになったところで、食堂に向かったのですが…カワサキさんがすでに来ていらつしやるとは意外でした」

「早起きのイメージはなかったよね」

「司令官と同じ部屋で寝ることになったと聞きましたし、司令官に起こされたのでは」

「それもそっか。提督は毎朝早いからね」

どんなイメージを持たれてるの俺?というか時間確認していなかったけど、どんだけ早く起きたんだ俺?そして、そんな俺よりも早く起きていたメタナイトに関しては、もはや何も言うまい。

「ところで、隴さんの肩に乗っているのはカニだよねえ。何に使うの?かに玉?カニ鍋それとも—」

「このカニは間違っても食用じゃないから。もし、そんなことしたらどうなるか…教えてほしい?」

「え、遠慮しま〜す!」

俺の質問に、素敵な笑顔でそう答える隴。うん、やっぱり艦娘、駆逐艦は怖い。極力怒らせないようにしよう。

「そろそろ、厨房に行きましょう!まだ時間に余裕があるとはいえ、大鯨さんをあまり待たせてもいけません。カワサキさん、またお話ししましょう!司令官のことについても、ぜひお聞きしたいです!」

「それもそうですね。では、カワサキさん、私たちはこれにて失礼いたします」

「じゃ、また今度ね」

「じゃ〜ね〜」

そう言って、3人は俺に別れを告げて、厨房の方へと向かって行った。そうか、駆逐艦寮からはこの食堂が一番近いのか。全員の名前や顔はまだ全然把握していないし、来た艦娘から覚えていこう。駆逐艦がどれだけいるかは分からないが、徐々に覚えていくのに越したことはない。すると、また誰かやってきたようだ。

「白露、いちばんのりい〜!おはよう〜!ぎいませ〜!」

「おはようございまーす！島風のほうが早かったよ！！白露ちゃん！」
元気がいいのが2人してやってきた。彼女らも駆逐艦なのだろうか。ただそれにしては発育がいいような気もするが。

「おはよ〜」

「つて、先客!!」

「カワサキだよ。悪いけど、2人は7番か8番目ぐらいだよ」

「え〜っ!!私そんなに遅いのー!」

「1番じゃなきやだーっ!」

そんなこと俺に言われてもどうしようもない。なるほど、見た目とは裏腹に、精神的には先ほどの3人よりは明らかに幼いぞ。やっぱり駆逐艦だわ、こいつら。

「昨日うちの鎮守府にやってきたカワサキさんだよね！あたしは白露、よろしくね!」

「島風です。よろしくお願いまーす。カワサキさん、島風より早く来てるなんて…さては只者ではないね?」

「相当早起きしたよ〜!島風さんも俺に勝つなら、もっと早く起きないとい〜」

「むむむ…今度は負けないからね!」

おう、いつでも来い。相手になってやるわ。もっともメタナイトの部屋で寝るのは昨日だけだろうし、今後朝食をここでとるかは定かではないが。

「白露さんはなんでそんなに1番にこだわるの〜?2番じゃダメなの〜?」

「あつたりまえだよ!1番じゃなきや意味ないし!」

「だから、どうして〜?」

「そ、それは…1番じゃない白露なんてそんなの白露じゃないから!なんたってあたしは白露型の1番艦だよ!」

俺の問いかけに白露は、何やら哲学っぽい言い方で返してきた。なんとというか、似合っているようで似合っていないな。

「なんか、難しいね〜」

「まあ、白露ちゃんは1番艦(笑)みたいなもんだから。逆に1番であ

ることに相当コンプレックスを感じているんじゃない」

「なにおーっ島風ちゃんの方こそ、一人しかいなくて1番艦だなんて、それこそ笑えるよ」

「馬鹿にしたなー！そこまで言うなら勝負だ！」

「いいよ、何で勝負する？」

「だったら俺が開く新しい店に来てよくそこで俺の作る料理で早食い勝負なんてどうかな？勝った方は一番目の王者、初代チャンピオンだよ。2人の決着にふさわしい勝負方法だと思わない？」

「それだ!!」

俺の提案を、2人ともアツサリと承諾してくれた。それにしてもこの2人―島風は1人とはいえ―長女だったのか。ハツキリ言ってる意外過ぎる。

「よーし、じゃあ審判もやってよ、カワサキ！島風が勝つところをみせてあげるから！」

「勝つのはこの白露だよ！カワサキ！あたしと島風ちゃんの早食い勝負のためにも、店をちゃんと開いてよね！約束したから！」

「だいじょくぶ、俺に任せてよ」

そう言った後、興奮しながら2人は食事をとりに向かって行った。とりあえず、これで毒見役を2人確保である。早食い勝負なんて、それこそ今やってしまえば1番てつとり早く済むものなのに。いやいや、ノリやすい2人でラッキーだった。ちよろいもんである。うん？誰だ。今、お前が言うなとか思ったヤツ。

それにしても、これまでの俺への接し方から判断するにしても、思ったより扱いは悪くないな。臃は少し辛辣なところもあったけど：今のところ会話した艦娘全員が、基本俺に友好的だったぞ。昨日はさぞどうなることやらと思っただけど、そんなに心配することもないよ。うな気がしてきたな。そもそも駆逐艦なんて艦娘といっても子供だ。子供相手に悲観的に考えるのはやめよう、それがいい。そうやって、余裕の表情を浮かべて座っていたら

「なに、締まりのない表情をしながら、ボーっとしてるのよ！もっとシヤキツとしなさい！このクズ！」

「のんきに過ぐしているんじゃないわよ！このクソコック！いい？伊良湖さんと一緒に店をやるからには、これからはしつかりやらないと許さないわよ！」

さつき俺が考えていたことが、フラグだとしても言わんばかりに、新しく食堂にやってきた2人に、のつけから思いつきり罵倒された。体格から判断しても、恐らく両方駆逐艦だと思うが、こんな小さい子供にクズだのクソだの言われる俺っていったい…

第9話

罵声が聞こえた方向に顔を向けてみると、そこには2人の艦娘が腰に手をあてながら、俺のことを睨みつけていた。ハッキリ言つてコワイ。一体俺が何をしたつていうのだろうか。

「威勢がいいねえ。えーっと君たちは…」

「駆逐艦、曙よ」

「同じく駆逐艦霞よ。覚えておきなさい」

「うん、わかつたよ。俺はねえ」「知っているから答えなくていいわ」…あつそう…」

銀髪の方が霞で、紫の髪の方が曙か。てつきり、名前を知らなかったから、俺のことをそんな呼び方するのかとも思つたりしたが、どうやらそうでもないらしい。まあ、確かに、昨日あの場に居合わせていなかったらこんな風に罵倒してくることはまずないだろう。仮に全くの初対面でクソとか言われた日には酷くへこむ。いや、今も若干へこんでいるけど。だが俺に対して、何が原因でこうもいら立ちを募らせているのだろうか。まずはそれを聞いてみよう。

「2人ともピリピリしているようだけど、どうしたの？買ったばかりのアイスを一口も食わずに全部落としたとか？」

「な、舐めてんの、あんた!? 私も霞もそんなくだらないことで、こんな風に怒鳴りつけたりなんかしないわよ! というか、そんなのただの八つ当たりじゃない! そんなみつともないマネしないわよ! そもそもこんな朝っぱらからアイスなんか食べるわけないでしょ! 仮に食べるにしても、そんな間拔けなことする馬鹿がどこにいるか!」

「曙。おおむね同意だけど、某駆逐艦が最近アイスを一口も食わずに落としていたらしいから、その辺にしておきなさい」

「えっ…そうなの? ごめん、ちよつと言ひ過ぎたわ」

今謝つたのは俺に対してじゃないんだろうな、きつと。それにしても適当に言つたつもりだったのに、まさか該当者がいたとは。そんな漫画のようなことをしてしまう駆逐艦に少し会つてみたい。誰だか分からないけどーいや、もしかしたらーまあ、とにかく、本当にご愁

傷様です。

「と、とにかく、カワサキ。あんた伊良湖さんと一緒に店を開くって、昨日言ったでしょ。だったら黙って見てるだけにはいかないわ」

「私もよ。伊良湖さんには何の心配もしていないけど、カワサキ。昨日の様子を見た限りだと、あんたが店にいることにはハッキリ言ってるものすごく不安を覚えたわ」

ま、マジかよ…改めて言うが、俺はここにきてからまだ一つも料理を出していない。それにも関わらず、ここまで言われるとは正直言ってるシヨックである。というかこの2人からの評価どれだけ低いんだ、俺。

「でもさ。2人とも、どうして俺たちが店を開くことに対して口を出してくるのさ。2人には関係ないじゃないか」

「関係大有りよ!!」

俺の反論に2人同時に反応した。なんていうか、こいつら息ぴったりだな。

「いい？ 私たち2人だけじゃないけど、以前、伊良湖さんが店を持ちたいって話してくれた時、その時は私たちも手伝うって約束したのよ！」

「そりやまた、どうして？」

「当然でしょ！ あんた、この鎮守府に所属している艦娘、全部で何人いるかわかってんの？ 全員が一度に来るのはないにせよ、そんな大勢を相手に料理を作りながら対応することなんてできるわけないでしょ！ アシスタントは絶対に必要なのよ！ 間宮さんと一緒に時ですらそうしているの！」

「それに私たちに限らず、伊良湖さんが作ってくれる甘味ものは、それこそ駆逐艦や海防艦をはじめとした気に入っている艦娘が多いのよ。今回あんたと一緒に店を出すことで、質が落ちるようなことがあつたら堪ったものじゃないし、それだけは何としても阻止しないといけないわ！」

「へえ、それは大変だねえ。じゃあ2人ともがんばらないとねえ」

「他人事みたいに言ってるんじゃないわよ!!そもその原因はアンタだつて言ってるでしょうが!!」

「まあまあ、落ち着いてよく。そんなに大きい声ばかり出して疲れない? 血圧上がっちゃおうよ」

「誰のせいだと思ってるのよ!!このクズ(クソ) コック!!!」

いかん。なんとかなだめようとしているのに、どうも火に油を注いでいるようらしい。2人ともいつもこんな調子なんだろうか。だとしたら周りの人は大変だな。

「とにかく! あんたのそのたるんだ根性を叩き直してあげるから、これからは覚悟しておきなさい! まったく。こんなに怒鳴ったことなんて、この鎮守府にきてから一度もなかったからちよつと疲れたわ」
「私もよ。あの提督とこのカワサキが同じ世界出身だなんて、ホンツト信じられないわ」

そう言い残して2人はこの場を離れていった。ありやりや、あんなに怒鳴ったことは今まで一度たりともなかったのか。まさかあんなにキツイ性格をした艦娘が2人もいるとは: 2人ともかわいい顔をしているけど、中身もあれだけかわいけりやな。もつとも中身がかわいくけど外見がキツイというのも、それはそれで対応に困るかもしれないが。

それにしても美少女に罵倒されるなんて、今まではずっとご褒美だと思っていたが、存外心にグサリとくるものがあつたぞ。これもカワサキになってしまったことの弊害なのだろうか。だとしたら、カワサキになったことマジ不幸。そして、霞と曙が店を手伝うということは、さつき2人が言つたように、これからも怒鳴り続けられること間違いなしである。: 正義は死んだのか: ? 神は滅びたのか: ? でもそういうえば、ゲームでカワサキを使って神(邪神)を倒したのは俺だしな。

はあ、これからどうしよう: じゃあ、怒鳴られないようにすればいいだけの話だつて? あえて言う、それは無理な相談だ。俺はため息をついてぐったりしていると、また近くに艦娘がやってきて

「元氣ないわねー。そんなんじゃないダメよ」

「でも、見ていて少しかわいそうだったのです」

「そんな風のため息について落ち込んでいると幸せが逃げちゃうわよ」

「暁もこの間アイスを一口も食べられずに落っことしていたときは、これ以上ないぐらい落ち込んでいたけどね。司令官がすぐに新しいのを用意してくれてなかったら、どうなっていたことか…」

「響——それは言わない約束って言ったでしょー！ぷんすか！」

いかにも仲良し4人組といった具合で、食事を持ってきながら、俺に話しかけてきた。…ていうかアイスを落っことした某駆逐艦って、薄々感づいてはいたが、案の定暁のことだったのか…もう、俺から言うことは何もないが、とりあえず暁よ、強く生きろ。

「4人ともおはよう。そっちの2人は暁さんと、響さんだよね。これからよろしく」

「あら、レディである私に“さん”付けをするなんて、わかっているじゃない。少し見直したわよ」

「スパシーパ。これからよろしく、カワサキさん」

どうも、この体は女性に対しては自然と“さん”付けをしてしまうらしい。まあ、アニメでもカワサキは、年下のフォーム相手でも途中から“さん”付けをしていたから、その名残でもあるんだろう。知らないけど。

「そして、こっちの2人が…」

「雷よ、これからよろしくね！」

「電です。よろしくお願いします」

雷と電か。なんか外見だけでなく、名前まで似た感じだとは。性格は違っていそうだが、間違えないようにしないと。ただ、電のほうは転生前でも見覚えがあったような気はする。結構メジャーな艦娘だったのかもしれないな。

「雷さんと電さんだねえ。これからよろしく」

「はい。カワサキさんは、今日はどういう予定なのですか？」

「俺は今日、大鯨さんに鎮守府を案内してもらおうよ」

「へーっ、大鯨さんが一人で？大変じゃないかしら…？」

「大鯨さんなら心配ないよ。暁とは違って」

「なんで、響はいつも一言多いのよ！」

「暁、落ち着きなさい。こぼしているわよ。ほら、これで拭くからこっちに寄って」

「あ、雷ありがとう…って、別に一人で拭けるわよ！暁はお姉さんよ！」

「暁ちゃん、食事中なのです。あまり騒いじゃダメなのです」

「そうだよ、暁。落ち着いて」

「元はといえば響のせいでしょ！」

なんだろう、さっきの2人とはまた別のベクトルで騒がしい。ただ、4人になったことでその分スケールアップしてはいるが。…違うな、騒いでいるのは暁だけだった。

「君たちは4人姉妹なんだね。第6駆逐隊だったっけ？」

「そうよ！今日も4人一緒に遠征に行くことになってるわ！」

「遠征？そんなのあるの？」

「ええ、そうよ！今日も司令官に褒めてもらえるようがんばるわ！」

「褒めてもらうことが目的なんて、雷はまだまだ子供ね…」

「でも、電も司令官さんに褒めてもらいたいです」

「私もだよ。じゃあ、司令官には暁は褒めなくてもいいって伝えておこうか」

「なんで響はそう意地悪なのよ！私だって司令官に褒めてもらいたいに決まってるでしょ!!」

「だったら最初から余計なこといわなければいいのです」

電の言う通りなのです。おっと危うくこつちまで口調が移ってしまいそうだ。それにしてもこの4人、見ていて全く飽きないな。これは元の世界ではこの4人組というくりでも、相当人気があったのではないのだろうか。

「みんな、食べ終えたわよね。もうそろそろ時間だし、いきましょ。カワサキさん、またね！」

「ハラシヨ。カワサキさん、また今度だね」

「電も今食べ終えたのです。カワサキさんお先に失礼します、なので

す」

「ちよつと、なんで雷が仕切っているのよ!?それに私はまだ食べ終えて…あーっもう!かわはひはん、ははへー!」

「またね〜」

俺は手を振りながら4人を見送った。いやあ、まるで台風のようにだったな…でも見ていて微笑ましかった。最後、暁は置いていかれそうだったので、食べ物を一気に口に流し込んでいたが…いつか喉を詰まらせそうで心配だな。

さて、食堂の人だかりも少なくなってきたし、割かし時間をつぶせたんじゃないだろうか。そろそろ俺も準備しなくては…って別にすることはないな。

「お待たせいたしました。それでは行きましょう」

そして、しばらく待っていると大鯨さんがこちらにやってきたので、俺たちは食堂を後にして鎮守府を回ることにした。

第10話

「…ということがあつてさ。みんな朝から元気だよね」

「そうだったんですか。しかし、話を聞く限りだと、カワサキさんは着々とこの鎮守府の皆さんと打ち解けているような気がしますね」

「そうかなあ？」

食堂を出た俺と大鯨さんは、先ほどの出来事を話しつつ、建物内を見回っていた。その建物というのは、俺が自己紹介をした大広間や、執務室、また、艦娘を回復することができるドックと呼ばれる場所等が存在するところで、この鎮守府の本館扱いとなるらしい。ちなみに提督の個人部屋もこの建物内にある。

ちなみに自己紹介の時のことに関しては、いい具合にすつとぼけておくことにした。もつとも俺から聞くことができないのであれば、他の誰かから聞けばいいだけの話ではあるから、バレるのも時間の問題のような気もするが。

「この建物内の紹介は粗方終わりましたので、一度外に出て違う場所を回しましょう」

「ほかに建物があるってこと？」

「そうですよ。それでは、次は工場の方へ顔を出してみましようか」「オツケ」

工場というのはよくわからないが、いずれにせよ大鯨さんが案内してくれるので、ここは黙って後についていこう。

「おお…なんかすごいところだね」

第一声が小学生並みの感想しか出てこなかったが、先ほどまでとはまるで違う光景を俺は目の当たりにしていた。そして中に入って様子を見てみる。するといかにも工場内と言った感じで、油や薬品の臭いで充満しており、物音はうるさいし、非常に蒸し暑くもある。率直に言つて、あまり長居をしたくない場所であった。

現にもう疲れてしまったのか、あちらこちらにたくさん的小人が浮かんでいるのが見えてきた。幻覚まで見えてしまっているというのはいま。ここは早いこと後にしたい、そう考えていると

「大鯨さん、こんにちは。工場に来るなんて珍しいですねー。今日はどうぞされたんですか」

「こんにちは、夕張さん。今日はこちらにいるカワサキさんの案内ということ、やってまいりました」

「おお！こちらが噂の!?ふわあ〜提督同様、本当に人間離れしていますね…」

ポニーテールの艦娘が大鯨さんに挨拶をしたかと思うと、俺の姿を見て驚いていた。すると奥からもう一人艦娘がやってきて、

「失礼ですよ、夕張。初対面の人に対して。はじめましてカワサキさん。私は工作艦明石と言います。これからよろしくお願いします」

「軽巡洋艦夕張です。明石の言う通り確かに失礼な反応でした。ごめんなさい」

「明石さんと夕張さんだね〜。これからよろしく〜」

なにはともあれ、挨拶を交わした。どうやら2人も俺の自己紹介の場には居合わせてはなかったらしい。それならそれで好都合である。

「ひとまずここで会話しているのもなんですから、休憩室に入りましょう。その部屋は空調も効いているので、ここよりは遥かに過ごしやすいですよ」

「さんせい。あ、それならついでに、昨日のカワサキさんが鎮守府の皆に自己紹介をしていたときの模様を録画にとつてあるから、それを見ながらにしない？私と明石はそのときその場にいなかったし…大鯨さんはどうですか？」

「実は私もその場にいなかったもので、そういうことならぜひその映像を見てみたいです。カワサキさんに聞いても、のらりくらりとはぐらかされちゃいましたし…」

俺に好都合なんてあるわけがなかった。結局運命には逆らえないってことか…

×××

「…カワサキ！伊良湖ちゃんと店を出すんなら、これからはもつと意

識を高く持ちなさいよ！わかった!？」

「カワサキは他人に料理を出すということについて、もうすこし深く考える必要があるんじゃないでしょうか」

「カワサキさん、私も料理に少しはたしなんでいますので、なにか手伝えることがあれば、いつでも協力しますので、言ってくださいね」

「2人ともキツイね。そして、ありがとく大鯨さくん」

早速俺は夕張と明石に小言をもらっていた。いつのまにやら呼び方も、`さん`付けから呼び捨てに格落ちしてしまっている。もつとも霞や曙のそれと比べると屁みたいなものではあるが。そんな中俺のことを気遣ってくれる大鯨さん。ああ、伊良湖さんに続いて天使がここにもいました。いや、伊良湖さんが天使なら、この人はどちらかといえば女神にあたるのだろうか。なんにせよ、実にありがたい存在であることこの上なしである。

「ところでさ。この…工廠だっけ？一体何をするとところなの？」

とりあえず話題を変えることにしよう。このまま針の筵というのは何としても避けたい。

「そうねえ…カワサキは何だと思った？」

「何かものを作っているところじゃないかなあ」

「それで大体合っているわよ。ちなみにどんなものを作っていると思う？」

「うくん…ここには小さい子がたくさんいるし…わかった、娯楽用品だ！」

「はい、大ハズレ。仮にも軍事用施設で、そんなものおおっぴろげに造れるわけないでしょ。正解は艦娘用の兵器開発よ」

「えくく!?アンタたちそんなの作れるの？すごいなあ。でも、この艦娘の多さから言って2人だけじゃ厳しいよ」

「普通ならそうだけど、私たちには頼もしい助っ人がいる。それが妖精さんと呼ばれる存在で、生産開発も含めたあらゆる面で艦娘を助けてくれるありがたい小人たちよ。貴方には見えていないだろうけど、工場内にはたくさん妖精さんがあちこち飛び回って活動しているの」

「そういうことは、さつきあつちごつち飛び回っていたのは、その妖精とやらだったのか。なるほど、なるほど…ちよつと待て。」

「うくん…ということは、あれは幻覚とかじゃなかったんだねえ〜」
「え？…どういうこと？」

「さつきの場所でき、多くの小人が飛び回っているのが見えたんだよねえ〜そのときは幻覚だと思っていたんだけど…でもそれにしても、妙にリアル感があつてさ〜不思議だったんだよね〜」

「…ということ、カ、カワサキ!? あんた妖精が見えるつてこと!?!」
「…だと思っけど、それがどうかした？」

「一般に妖精さんが見える人は、ほんのごく一部しかいないと言われています。その中でも妖精さんと会話ができたり、好かれたりすると、なんとさらに絞られてきます。私たち艦娘も妖精さんの姿は見えど、明確な意思疎通まではできません。そしてそういった方たちが所謂提督としての適性があるということですが…」

「ちよつと実験してみましょ! 妖精さんを連れてくるからここで待ってて〜!」

「そう言つて夕張は部屋を飛び出していき、しばらくたつとその妖精を数人伴つて、この場に戻ってきた。」

「とりあえず、カワサキ。ここに何人の妖精さんがいるかわかる？」

「そくだね〜。俺には4人の妖精の姿が見えているよ〜」

「すごい、合つてる…何か話しかけてみて」

「え〜つと…ねえ〜君たち。今度俺は店を開くんだけど良かったら食べに来ない〜?」

「おいしいものがでるならむろんいきます!」

「たくさんよういしておいてください」

「うでもあげておくよ〜に!」

「そしてただにしておくれ」

「え〜、それは無理だよ〜。払うものは払わないと〜」

「どう…明石!?!」

「会話が成立しているわ…これは間違いないわね」

明石は何やらイヤホンのようなものを耳からとり外すと、このよう

に言った。どうもそれを耳に着けていると、妖精の話している内容がわかるらしい。なんともビックリアイテムである。

「…ということは、カワサキさんには提督としての適性があるんですね！すごいです！」

「そ、そうなんだ。いまいちピンとこないけどねえ」

「それにしてもまさかカワサキが…提督といい、違う世界から来た人には何か特別な能力でもあるのかしら…？」

そうか、俺には提督としての適性があるのか。もしかして、料理人よりも提督の方が向いているとか？

「そういえば、メタナイト卿も適性があったってこと？」

「ええ、そうよ。妖精さんたちの提督の慕い具合はもう半端じゃないわ」

「でも、俺も結構仲良くできているよ。そのうち俺がここの鎮守府の提督になったりしてね〜ハハハ」

「…は？」

場が一瞬で凍りついた。なんかデジャヴ…

「あんまり調子に乗らないでくれる？提督とあんたなんて、比べること自体がおこがましいわ」

「私たちの提督はメタナイト提督しかありませんから」

「カワサキさん、今回は不問にしますが、…次はありませんよ」

「ヒィ〜!?!ギヤグのつもりだったのに…」

夕張、明石どころか大鯨さんまでマジギレ寸前であった。本当にごめんなさい。

「ばかもやすみやすみいえ」

「わらえなさすぎるじょうだん」

「たかがかわさきのくせになにをちようしにのってるんだか」

「いつぺんうまれかわってきからでなおしてこい」

妖精たちの怒りすら買ってしまった。もはやこの鎮守府ではメタナイトは神格化されているのではないだろうか…というか、最後のやつ。残念ながら俺はもうすでに生まれ変わっているんだよ。

と、まあこんな風にひと悶着もあつたりしたが、工廠についての説

明は一通り受け、俺たちは次の場所へと向かうことにした。

第11話

あれから俺たちは、各艦娘寮、そして訓練場、出撃地点、学び舎といった順で回っていった。艦娘寮には入っていないが、駆逐艦寮など、複数の寮が存在していた。単独なのは数の多い駆逐艦だけで、軽巡と重巡は一緒、と言った風に艦種別に分けられてはいるが、他の艦と合同であるのが普通のようなのだ。もともと海防艦組は人数が少ないこともあり、本館にそれぞれ部屋を構えているらしいが：それ以外にも他に何か理由はあるのかもしれない。

そして訓練場の広いこと、広いこと。何でもメタナイトの艦娘を鍛えるための力の入れようは尋常ではないらしく、そこはとりわけ拘っているらしい。それに自身の鍛錬にも使っていることとか：ことによるとそちらの方が、訓練場に力が入っている大きな原因なのかもしれない。

また、学び舎というのは、指導役の艦娘が、まだ経験の少ない艦娘たちや、理解の足りていない艦娘たちに、教養や戦術などを教えてもらっている場所であるとのことだ。こちらも中には入っていないが、練習巡洋艦と呼ばれる艦娘が中心となって指導役にあたるらしい。

「そしてこちらが間宮さんの店になりますね。本日は伊良湖さんの移動に伴って、臨時休業になります」

でもって今、俺たちが来ているのが食事処間宮だ。そうか、食器とか材料とか運ぶものはそれなりにあるもんな。メタナイトはああ言っていたけど、結構手伝えることあったんじゃないか？

「あ、カワサキさん！それに大鯨さんも、どうもこんにちは！」

すると、荷物をまとめていた伊良湖さんが俺たちに気づくなり明るく挨拶をしてくれてくれた。

「伊良湖さくん！会いたかった〜！」

そして、俺は10年来の親友に久しぶりに会ったかのごとく、大げさなりアクションをとってみた。いや、実際会えて嬉しいんだけども。そう、もうすぐ抱き合うといった瞬間、

ポカッ!!

「鎮守府内での不純行為は厳禁です。風紀が乱れます」

何か物が飛んできて俺にぶつかった。少し痛い…

「イタタタタ…別に抱き合うぐらいいいじゃないか」

「むやみやたらに異性と触れ合うことを控える、司令のお達しです。いくらカワサキさんが司令の知人と言えど、見過ごすことはまかりありません」

「あはは…不知火ちゃんは相変わらずだね」

伊良湖さんが少し苦笑い、といった表情でこっちを見ている。今俺に物を投げつけた艦娘は不知火というらしい。

「しかし、台所用品を投げてしまったことについては反省しなければなりません。司令からの教えには、物を粗末に扱うことこれを許さず、ともあるので」

台所用品？床を見るとそこには食器を洗うためのスポンジが落ちていた。何をぶつけられたかと思えばこれだったのか…いや、そんなことよりも、だ。

「そこは人に物を投げつけたことを、反省すべきだろう。いくら軽くても、柔らかいと言ってもちよつと痛かったよ」

「人に物を投げつけた…カワサキさんは人ではないでしょう？」

「あのね〜！そういうことじゃなくてさ〜」

「冗談です。たとえ外見がどのような姿をしていても、真摯に接するようと、司令からもよく言われておりますので。先ほどは失礼しました、カワサキさん」

さつきから司令、司令って、そればかりだなこの艦娘。

「相変わらず不知火さんは提督の教えに忠実ですね」

大鯨さんは不知火のことをこのように評しているが、というよりも

「忠実というか…融通が利かないっていった方がいいんじゃない？
堅物っていうかさ〜」

「司令はその融通が利かないところが不知火の美点だとも仰ってくれました。不知火にとっては最大の誉め言葉です」

この不知火って艦娘は、メタナイトに対して敬意を通り越して崇拜

までですらしてそうだな。なんとというか怖い。

「不知火ちゃんはこの鎮守府でもとりわけ提督に心酔しているから：カワサキさんもそのところは分かっておいてね」

さらに間宮さんも奥から顔を出してきた。よし、わかった。不知火の前では軽口は絶対に叩かないでおこう。少しでもメタナイトのことを軽んじたようなことを言ったことが不知火の耳に入ってしまったら―恐ろしい光景が浮かび上がりそうだ。眼光もただならぬものを感じるし。

「そういえば、不知火さんはどうしてここにいるの？今日は店じまいでしょ〜」

「伊良湖さんの荷物整理の手伝いをいたしております。不肖ながらこの不知火も、この度カワサキさんと伊良湖さんの店のサポート役に就かせていただきます。全身全霊身を尽くしますのでよろしくお願いします。」

うわ：あまり知りたくなかった新事実。霞といい、曙といい、なんかキツイ艦娘ばかり集まっているのは気のせいだろうか。いや、不知火はキツイというよりも堅いか。個人的には第六駆逐隊、あるいは白露や島風のような扱いやすくて、こつちもまったりできそうな艦娘の方がよかったのだが。よし、こうなったら―

「不知火さくん。そんなに張り詰める必要ないよ。メタナイト卿も言っていたよ。最初から気合を入れすぎると、上手くいくものも上手くいかないってさ〜」

「司令がそのようなことを…なるほど、カワサキさんの先ほどからのおちやらかした態度は、司令の忠告を守ってこそそのものだったのですね。そうとも知らずに出過ぎた発言、この度の不知火の落ち度お許しください」

「提督がそう仰るとは少し意外ですね…」

大鯨さんは不思議そうにしているが、そりゃ今のは俺のハツタリだからな。しかし思った通り、メタナイトの名前を出せば不知火は大人しくしてくれそうだな。これは今後も使えそうだし、なんなら他にも応用できそうだぞ。俺がそう考えていると、

「皆、ご苦勞。首尾はどうだ」

「お疲れ様です…」

この場を通りかかったメタナイトが、緑の髪 of 艦娘に抱かれながら俺たちに声をかけてきた。

「「提督（司令）、お疲れ様です」」

「お疲れ、メタナイト卿。あれ？異性に触れ合うのはダメだったはずだよ。ねえ、不知火さん？」

「いえ、察するにこれは山風への褒賞といったところでしょう。ですよね？山風」

「うん…この前の出撃でMVPをとったときに、ご褒美に何がいいって言われて…」

どうやらこの艦娘は山風というらしい。これまたメタナイトにすごく懐いているな。

「山風たつての希望だ。毎回やたらと抱き着かれては堪らないが、こういった秘書艦の日に鎮守府内を見回るぐらいなら特に問題はないもつともこれでご褒美になっているのかは私自身ではピンとこないが…」

「「いえ、率直に言つて最高に羨ましいです」」

皆、異口同音にこう答えた。もはや何も言うまい。

「そ、そうか…まあ、そんなことより、準備は順調か、伊良湖」

「はい！間宮さんと不知火ちゃんの協力もあつて、もうそろそろ荷物を移しだします」

「もう、それぐらいの段階だったんだね。よし、張り切つていこう！」

こういうのを見ると実感が湧き出してくるものである。いやいや、改めて自分が店を開くという再認識をさせられるな。俺も自ずとテンションが上がってきた。すると――

「カワサキにしてはいい心がけだ。やはり、出だしは肝心だからな。いつも以上に気合を入れて臨むくらいで丁度いいだろう」

そう感心するメタナイト。褒めてくれるのはいいのだが、頼む、空気を読んでくれ。そこに啞然、呆然とした様子で棒立ちになっている

艦娘が1名いらっしやるでしょーが！

「皆…頑張ってください。提督、お店が開いたら一緒に行きたい…」
「ああ、そうだな。店を手伝う艦娘も、カワサキのように張り切ってくれることを期待しよう。また後で様子を見に来る。それでは」

そういつて山風とともにこの場を去っていくメタナイト。不知火の様子？そんなの直視できない。

「司令の真意を見抜けずにこうも騙されるとは、何たる不覚…！この不知火の一生の落ち度…！そしてカワサキ…霞や曙が言っていたように、貴方は本当に性根から叩き直す必要があるようですね…！！」

女の子が、いや人がしてはいけない表情になっている不知火。ああ、どうしよう。とりあえず何とかなだめないと…

「いや、人に褒められるのって気持ちいいよねえ。不知火さんも褒められるようにすればいいんじゃないかな」

「この外道があ…！！」

めでたく沸点を迎えましたとき。この後めちやくちやぶつ飛ばされた。

「自業自得まさにここに極まれり、つていったところね…」

「カワサキさんもいい人ではあるのですが、もう少し発言に気を付けることはできないのでしょうか…」

間宮さんと大鯨さんもややあきれ顔といったところで、このように発言する始末…ああ、味方はいないのか。どうあがいても絶望。

「まあまあ…それよりもあともう少しですし、残りの作業を終わらせちゃって移動しましょう！カワサキさんもせっかく来てくれたことですし、新しくお店を出す場所に一緒に向かいましょう！ね？」

そうやって多少強引ではあるが、雰囲気を変えようとしてくれる伊良湖さんはさながら天使であった。ユーアーナンバーワン！！